

表現における作品鑑賞と発達に関する研究

—小学校 低・中・高学年の比較を通して—

益子 理紗子 (埼玉大学)

1. 目的

本研究では、表現系ダンスの指導で「踊る—創る」に比べ「見る」ことについての研究が十分でないことから、小学生を対象とした創作ダンスの鑑賞実験を行い、学年ごとの「見る力」を比較考察し表現系ダンスの指導に資する知見を得ることを目的とした。

2. 研究方法

①S 大学附属小学校教員への表現運動系の授業の取り組み調査、②同校児童に創作ダンスの鑑賞実験を行い、その後質問紙調査を実施した。②の詳細は以下の通りである。

- 1) 対象者：S 大学附属小学校に在学する、1 年生 102 名、2 年生 101 名、3 年生 104 名、4 年生 88 名、5 年生 100 名、6 年生 94 名の計 589 名
- 2) 鑑賞・調査期日：平成 30 年 10 月 25 日(木)
- 3) 鑑賞作品：S 大学ダンス部が創作した多様な作風の全 8 作品：《人間讃歌》、《ヒックリカエリムシ》、《お母さんのヒ・ミ・ツ》《声失いて哭く》《人形の家》《不確かさの中で滾る躰》《to exist》《悼みの地 —C. Boltanski が標した「生の痕跡」》

3. 結果と考察

1) 対象小学校の表現運動系授業の取り組み

対象小学校では学習指導要領解説の内容に応じた表現の授業を行っており、自ら踊り創るだけでなく、見る（見せ合う）学習を取り入れていた。

2) 好きな作品の選択とその理由から見た比較

回答結果より、好きな作品 1 位は全学年に共通して《お母さんのヒ・ミ・ツ》であった。選択理由については「私たちが学校に行った後、お母さんがこんなことをしていると思うと面白い」のようにテーマに関する記述が多く、身近でわかりやすい題材だったことが要因と考えられる。特に低学年で多く選ばれたのは《ヒックリカエリムシ》で、この作品も「ムシ」が「探検する」という低学年にとって身近

な生き物が題材であったことが要因と考えられる。中学年では、選択理由にテーマだけでなく、「体を大きく使って」など演者の体や動きに着眼した記述が多くみられ、表現の基本的な技能として学習指導要領解説に示されている「全身で踊ること」（文部科学省 2008：35）が鑑賞の観点となっていることが分かった。また、高学年では「私たちがよく知っているテーマだったためダンスの表現からどう思っているのか考えるのが楽しかった」など、低・中学年よりも、作品を客観的にみられるようになることが明らかになった。

3) 《悼みの地 —C. Boltanski が標した「生の痕跡」》についての自由記述から見た比較

この作品は戦争やテロにより多くの命が犠牲になっている現実を問うた作品であったが、全学年に共通して好きな作品として上位に選ばれていた。

自由記述から、低学年でも多くの児童が作品のテーマを理解しようとし、死という作品のテーマを受け止めていることが分かった。中学年以上になると、音響と動きの関わりなど、複数の観点から記述しており、「これからもそのような戦争やテロを減らしていけないといけない」のように自らの生活と絡めて鑑賞している記述も見られた。また、高学年では、テーマについて「無残に奪われた多くの命」の悲しさやむごさを感じたことに留まらず、「命の大切さ」や「生きていることの喜び」などについて記述している児童も見られ、鑑賞力が深まっていることが明らかになった。

4. 結論

本研究において、表現系ダンスの授業で学んだ技能内容が鑑賞力として活かされており、学年が上がるにつれて様々な観点で作品を鑑賞できるようになることが明らかとなった。また、低学年でも、作品の動きやイメージを自らの心身で体験すること（内的模倣）によって、難解なテーマであってもそれを感じ取ることができたのではないかと推察された。